
はびねす！ - 幸せの意味 -

ten

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

はぴねす！ - 幸せの意味 -

【Nコード】

N7027I

【作者名】

ten

【あらすじ】

はぴねす！の二次創作。

主人公は雄真。ヒロインは決めてない。

オリキャラ（女）は出す予定。男は…敵なら出る予定。

プロローグ（前書き）

初めての投稿となります。

この作品ははびねす！の二次創作です。

「もし雄真が幼少期に魔法の道を捨ててなかったら」をテーマにした作品です。

作中では瑞穂坂の1年生から始まります。

注：キャラの性格変わってます。（若干オリキャラ化してます。）

魔法もオリジナル要素を加えてあります。

プロローグ

―公園―

「ねえ…やめてよ!」

「やだよ!」

それは夢…。

遠い過去の出来事…。

幼き日の出来事…。

「やめろ!」

少年の運命を変える出来事…。

「なんだよお前!」

「その子が嫌がっているだろ!」

まだ、魔法を使う意味を知らなかった頃の少年の思い出…。

「こいつ女の味方してやんの！」
「……………」

だからこそ、少年は魔法を使う…。

ただ、ただ少女を助けたいがために…。

「エル・アムダルト・リ・エルス……………」

母から教わった最初の魔法…。

「デイ・ルテ……………」

「な、なんだこれ!？」

「う、浮いて……………」

「う、うわああ!」

少女を虐めていた三人の少年の体が中に浮く。

「…これで懲りた?」

そう言っつて少年は魔法を解いた。

地面に尻をついた少年達が一目散に逃げていく。

「ふう…大丈夫?」

「あ、うん…」

少年が手を貸すと少女は手を握って立ち上がる。

「ありがとう…」

「うん！」

少年はまだ知らない。魔法を使うことがどういうことかを…。

プロローグ2（前書き）

誤字、脱字などがあつたら報告していただけると助かります。

プロローグ2

「ねえ……」

「なあに？」

「どうしてみんなボクを避けるのかな？」

「……………」

「ボク、何も悪いことしてないよ……」

それは、少年が魔法を使った日から数日が過ぎたある晴れた日のこと。

「キミは魔法って何だと思う？」

「…………… わからない」

俺があの人と初めて会った日のこと。

「難しかったか……。魔法はね、道具だと私は思うの」

「どつぐぐ？」

「そう、使い方次第で人を助ける事も傷つけることもできる」

「……………」

初めて魔法の事を考えたあの日。

「キミは魔法で人を傷つけないの？」

「ううん。傷つけたくない」

「そう、でもね今の君は魔法で簡単に人を傷つけてしまう」「え……」

初めて魔法の怖さを知った日。

「ねえ、私の弟子にならない？」

「弟子？」

「そう、キミはこれから魔法のことを勉強するの。そうすれば誰も傷つけることはなくなる」

「本当？」

「ええ、ただしキミが本当に魔法を習う気があるならね」

「…分かった。ボク魔法を習うよ」

「そう、良い子ね」

それは、初めて先生にあった日の出来事。

第一話

―小日向家 雄真の部屋―

P i P i P i P i P i P i P i P i

カチャ…。

「うーん…」

眠い…。もう少しだけ…。

ガチャ

「兄さん、起きてますか？」

誰だ…俺の安眠を妨害しようとする不届き者は…。

「もう…えい！」

ポフツ

「……………」

「えへへ…。兄さん／＼／」

状況確認。ここはどこだ？俺の部屋だ。俺は誰だ？小日向雄真。俺は何をしている？寝ていて今起きた。状況確認終了。

「…すもも、何をしている」
「あ、兄さんおはようございます」

この少女は小日向すもも、俺の妹だ。ただし血は繋がってない。つまり義妹ということになる。

俺の父親とすももの母親が再婚したことで義理の兄妹となった訳だが…。

「ああ、おはよう。それで何をしているんだ？」

「兄さんを起こしに来たんですよ」

「それでなんで俺の上に乗っている…」

何故か俺の上に乗っかっている。

「兄さんを起こそうとしたんです。それよりも朝ごはんの仕度ができましたよ」

「ん、分かった」

何故俺を起こすために俺の上に乗っていたのかは謎だったがまあ気にしないでおこう。

ー小日向家 リビングー

朝食を済ませせ学校に行く準備をし、テレビを見ながらお茶をすする。

「はあ…やっぱ日本人はお茶だよな」

「なにおじいさんくさいこと言ってるんですか？」

「気にするな」

「それより、学校は大丈夫なんですか？」

「ああ、今日は入学式だからな、10:00から始まるから9:3

0に出れば間見合つた」

小日向家からは徒歩で約20分の所にある瑞穂坂学園。今日からここに通う事になる。

「はあ…」

「どうしたんだよ」

「だって…今日から兄さんと一緒に学校に通えなくなるんですよ？」

「なんでそんなことで落ち込んでるんだよ…」

「そんなことじゃありませんよ！」

「ふふつ、雄真君もまだまだね」

この人は小日向こひなた音羽おとほ、俺とすももの母親だ。俺とは血のつながりがないため義理の母親という事になる。

すももの実の母親でもあり、一言で言えば『年齢不詳の美少女？』

「？は何かな雄・真・君？」

「ナンデモアリマセン」

な、何故心の声が聞こえた…。恐るべしかーさん…。

分かりやすく言えば見た目が幼い。これで一児の母親だって言うんだから世も末である。

「雄・真・君」

「な、何でしょうか…」

「べつにつに〜？」

もはや何も言うまい…。

その後、すももを送り出し、時間になったため学園に行く事にした。

「瑞穂坂学園」

(ついに来たよ…)

ここは私立瑞穂坂学園。今日からここに通う事になるわけだが、この学校の最大の特徴として魔法科が存在することがあげられる。

日本にも数少ない魔法科を持つこの学園は、入試倍率だけでそこらの学校の数倍は軽く超えるほどである。

魔法科以外にも普通科が存在するが、こちらも魔法科の影響を受けてか倍率はそこそこ高い。(それでも圧倒的に魔法科のほうが高いのだが)

そんな魔法科だが、俺は見事に狭き門をくぐり抜け、魔法科に入学することができた。

今更だが、俺は魔法を使う事ができる。でなければ魔法科に入る事すらできない訳だが。

「体育館はつと」どいてー!!」「…ん？」

今何か聞こえたような…。

「きゃあー!!！」

「ちよ！」

ズシツという嫌な音と共に下敷きにされる雄真。

「いってえー…」

「あたた…」

「なんなんだよ…」

「もう…ちゃんと避けなさいよ！」

ぶつかって来た少女はいきなり突っかかってくる。

「俺が悪いのか？」

「あんたがポケットとしてるからでしょ！」

「いや、そっちが突っ込んでくるからだろ…」

「なんですって？ってこんなことしてる暇なかったんだ！じゃあね
！」

そう言うと慌てて立ち上がり駆け出していった。

「…なんだったんだ？」

雄真一人を残して。

―瑞穂坂学園 魔法科―

入学式も終わり教室に入る。

「ここが魔法科…」

やはり魔法科というだけあって独特の雰囲気がある。

(小日向、小日向と…)

あいうえお順に並んでいる机から自分の机を探しだし席に着く。雄

真の席は窓際から2列目の一番後ろの席だ。

(それにしても…女子が多いな…)

そう、魔法科の8割以上が女子で男子は雄真を入れて6人しかいない。

(居心地悪…)

別に積極的に女子に話せるわけでもない雄真はそのままポケットとしながら座っていた。

「席に着け」

しばらくすると担任であろう先生が入ってきた。

「私はこのクラスの担任になった大林望だ。おおはやし のぼむ一年間皆と共にこのクラスで過ごすことになるがよろしく」

そう言っ先生は出席兼自己紹介をクラス一人一人にさせてゆく。

「よし、今日はこれで終わりだが、明日はマジックワンドを作ってもらおう。各自マジックワンドにする物を用意するように」

マジックワンドは自身の想いが詰まったものを杖にする。術者との繋がりが強ければ強いほど強力なワンドができるし術者自身の能力によってもワンドの性能が変わる。

自己紹介が終り、連絡事項を伝えた後、先生は教室から出て行った。

翌日

―小日向家 雄真の部屋―

「……………」

何故だろう…。俺は最近この光景を見た気がする…。

「ぐるぐる」

「…すもも」

「えへへ…兄さん／＼」

雄真の上に乗っかり、ぐるぐる転がっていたり腕に抱きついて頬をすりすりしていた。

「…何をしている」

「あ、兄さんおはようございます」

「おはよう。それでお前は何をやっている？」

「兄さんを起こそうとしていたんですよ」

「それがなんで俺の上に乗っかってるんだよ…」

「だって…兄さんと一緒に寝て…ごによごによ…／＼」

すももが何かを言っているがよく聞こえない。

「兄さんと…なんだって？」

「な、なんでもありません!!」

ドタドタドタ…バタッ

「ヒヤッ!」

慌てて出ていったすももが奥で悲鳴を上げていた。大方廊下で足でもぶつけたんだろう。

「なんだっただ…あいつ」

すももの慌てぶりにあっけに取られていたが着替えてリビングの下りていった。

―通学路―

「雄真遅ーい！」

「悪い」

「おう、雄真」

「おはよう、八子、準」

いつもの待ち合わせ場所に着くと、準と八子の二人はもう先に来ていた。

「おはよう、それじゃ行こっか」

「ええい、抱きつくな」

この女子生徒の格好をした奴は渡良瀬準^{わたらせじゅん}。前の学校からの腐れ縁だ。ちなみに美少女に見えるが“れっきとした男”である。

つまりおかm「雄真」

ゾクッ！

（なんだ今の悪寒は…）

「何やってるんだよ二人とも、さっさと行くぞ」

こいつは高溝八輔。たかみぞはちすけ通称八チ。準と同じく腐れ縁で一言で言えばアホ。

「誰がアホじゃー!」

「うるさいわね…あんたからアホを取ったら何が残んのよ」

「……俺の扱い酷すぎね?」

このように八チは落ち担当だ。

「というかそろそろ離れる準……」

「いいじゃない、クラスが違うんだからこういつときしか会えないんだし」

「本当だぜ…雄真だけ魔法科なんてよ…」

「お前ら…」

こんなにも俺のことを…良い奴らだよ…。

「あーなんで俺には魔法の力が無かったんだよ!魔法科には美少女がたくさんいるのに!ちくしょー!!雄真だけずりぞー!」

「……………」

「雄真?」

「俺の感動を返せー!…!」

「ぐはあつつつ!…!」

八チの鳩尾に一発入れておく。

「行くぞ準」

「う、うん…」

苦笑いしている準と共に学園へと向かった。

「お、置いてかないでくれー…」

屍を一体放置したまま。

第二話

―瑞穂坂学園 魔法科―

教室に入り数少ない数名の男子に挨拶をし自分の席に着く。そしてクラスの担任が来るまで窓の外を眺めていた。

(マジックワンドか…)

今日のクラスの話題はやはりマジックワンドに関する事で持ちきりだった。

何をワンドにするのか、どんなワンドになるのか…。

「……………」

ポケットから蒼い宝石のような石を取り出す。

雄真は魔法科に入学する前からこの石をワンドにすることを決めていた。

雄真にとって大切なその石は、これ以上ないくらいのワンドの材料になる。

「席に着け」

担任が教室に入ってきてきてHRを始めるが、雄真は殆ど聞いてなかった。

- 1時間目 -

今日は午前中を使ってワンドの作成にあたる。

一人一人呼ばれ、別室にてワンドを作ることになっている。

出席番号順に呼ばれ別室に移動しワンドの作成に当たるのだが、やはり皆緊張しているようで教室を出て行く様子はどこか硬い。

「次、小日向雄真」

「あ、はい」

名前が呼ばれたので先生についてゆく。

「空き教室」

普段は使われない空き教室につれてこられ、中に入る。

中は暗幕で囲われ床には魔法陣が描かれていた。

その魔法陣は六芒星が描かれ、それぞれの点には6人の魔法服を身につけた人たちが（おそらく魔法科の教師陣だろう）立っていた。

「では、小日向雄真君。魔法陣の中央に立ちマジックワンドにするものを手に持って下さい」

「はい」

言われたとおり六芒星の中心に立ち、石を右手で握り締める。

「そのまま強く念じて下さい」

「……………」

言われたとおり強く念じる。

（これは…）

すると、手の中の石が輝きだした。

(温かい…それに…なんだか懐かしい)

光はやがて強く大きく発し、部屋の中を満たすと共に消えていった。

(これが…俺のワンド…)

手の中の石が消滅し、目の前には蒼を基調とし金色の装飾が施されたシンプルだが美しいワンドが浮かんでいた。

杖の先端には先ほどまで握っていた石が埋め込まれている。

「名前を…そのワンドに名前を与えて下さい」

「名前は……」

「名前は…セレス…セレスティアルだ。長いからセレスでいいか」

セレスティアル…「天上の、神聖な」という意味を持つこの名前は美しいこのワンドにぴったりといえる。

「…初めまして雄真様」

「様はいらない」

「しかし…」

「様付けはやめてくれ」

「分かりました。ではご主人様で」

「それはもつとだめだ」

「では…マスターでいいでしょうか？」

「ああ、それでいい」

先生がゴホンと咳を一回。続けて「ワンドができたなら早く教室に戻りなさい」と言ってきたのでセレスを掴んで教室から退場した。

―魔法科―

教室に戻った途端、雄真はクラスの皆からワンドのことを聞かれた。

「小日向君のワンド綺麗だねー」

「うん…」

「名前は？なんて名前？」

「セレスティアル」

「初めまして、セレスティアルと申します。以後お見知りおきを」

「凄ーい！喋った！！」

「凄ーい？」

「そうだよ！ワンドが喋るのはそのワンドが強力な証拠なんだよ」

「ふーん…」

「ちょっとごめんねー！！」

雄真が女子たちに囲まれているところに女子生徒が割って入ってくる。

「ふーん…なるほど…」

「…なに？」

「あ、ごめん。綺麗なワンドだね」

「ありがとうございます」

「へえ…。君のワンド“も”喋るんだ」

「も？」

「そう、私のワンドもなんだ」

そう言っって女子生徒が自分のワンドを見せる。

「お初にお目にかかります…私、杏璃様にお使いするパエリアと申します」

「これはどうも」丁寧」

ワンド同士で気が合うのだろうか…。

「それで、君は？」

「あ、ごめん。私は柘杏璃ひいらぎあんりよろしくね」

「ああ、俺は小日向雄真。よろしく」

「雄真…ね。うーん…どこかで会ったような…」

「うん？そう言えば俺もどこかで会ったような気が…」

……

「あー！！入学式のときの「突っ込んできた奴！！」「ポケットと突っ立ってた奴！！」」

「ちよつと待て…ポケットとってなんだよ！」

「雄真こそ！私は突っ込んでなんかいないわよ！」

「あのー…」

「なんだよ！」「なによ！」

「先生が来てるよ…」

「「え？」「」

ゴスツ！

「二人して何をやっている！大人しく席に着け」

頭を小突かれ渋々席に着く二人。

- 昼休み -

昼になり雄真は机の上に弁当を広げる。

「へえー。雄真のお弁当おいしそうだね」

俺の弁当に興味を持ったのか杏璃が別の女子を連れて話しかけてきた。

「ん？ああ、まあ俺が作ったんじゃないんだけどな」

「お母さん？」

「いや、妹」

「妹!？」

「へえー雄真って妹がいたんだ」

「まあな。って誰？」

「あ、ごめんなさい。私、かみさかはるひ神坂春姫っていいいます。それでこっちが私のマジックワンドの…」

「ソプラノです」

「ああ、小日向雄真です。これが俺のワンドのセレスティアル」

「初めまして、セレスティアルです。長いのでセレスとお呼びください」

「……………」

何故だろう……。どこかで会ったような……。

「あの…なにか？」

「いや、なんでもない」

「はあ」

「それより、お昼一緒していい？」

「ああ、いいけど」

「それじゃ、一緒に食べましょ」
「うん」

こうして三人で昼食を食べたのだが…周り（特に数少ない男子）からの視線が痛かった気がする。

翌日

―魔法科 実習室―

今日は俺達にとって始めての魔法の実習がある。

「では実習を始める前に各自の魔力を測定します」
（測定な…）

俺にとって魔力の測定は意味を成さない。

それは…まあ追々話そう。

「マスター。あれはどうします？」

「解かなくていい。それとクラスの連中がいる前であまりそのことは話すな」

「分かりました」

「雄真どうしたの？二人で話し込んで」

「なんでもない。それよりさっさと測ろうぜ」

「うん」

測定結果

雄真…… 264

杏璃…… 281

春姫…… 314

その他一般生徒平均185

ちなみにCLASS Bは約300前後の魔力量が必要になる。
また、魔力は体の成長と共に上昇するので毎年測定している。

「あー！春姫に負けたー！！」

「あ、杏璃ちゃん……」

約一名納得がいていない者がいるが放っておこう。

………

―魔法科 教室―

実習が終わり昼になったので雄真たちは教室に帰ってきていた。

「もう、春姫に負けるなんて！」

「まあまあ杏璃ちゃん落ち着いて」

「たかが一回負けたくらいで何いじけてるんだよ」

「いじけてなんか無いわよ！」

今はそつとしたいほうがいいか……。

「やれやれ……」

「そういう雄真はどうだったのよ」

「俺か？まあ……勝ったけど」

俺は一応クラスの男子とやりあった。といっても軽く流したが……。

「ムカツ！」

「はあ…。神坂さん、柎は頼んだ」

「あれ、どこかに行くの？」

「ああ、Oasisに行ってくるから」

「うん分かった」

—Oasis—

ここは瑞穂坂学園の学生食堂でOasisという。

「ゆうーまーくん!!!」

「…なに？」

オアシスに入った途端にかーさん（かーさんはこのOasisで働いている）に声をかけられた。

「もうつれないんだから。それよりお昼食べるんでしょ、何にする？」

「コロッケ入ってるやつある？」

「コロッケならA定食ね。ちょっと待っててね」

そう言って厨房にかけて行くかーさんを見送りながら食堂を見渡している。一人の女生徒と目が合う。

「……………」

「……………」

すると女生徒は立ち上がり俺の方に近づいて来た。

「あの……なにか」

「あなた、とても不幸な相をお持ちですね」

「は？」

え…何この人いきなり…。

「占いですよ、う・ら・な・い」

「占い…ですか？」

「はい、私占いをやってまして…あなたを見た瞬間に視えたんです。それもかなり悲惨な……」

……

「いえ…気にしないで下さい」

「いやいや！そこまで言われたら気になりますから！」

「本当に何でもないですから。あ、自己紹介が遅れました私、たかみね高嶺

こゆき小雪と申します」

「はあ…小日向雄真です」

「雄真さんですか、よろしく願いします」

「こちらこそ」

「では私用がありますので失礼します」

「はあ…」

なんだっただんだ…。

第三話

7月下旬

―魔法科―

入学から3ヶ月近く経とうとしている頃、俺は一つの問題を抱えていた。

「……………」

「……………」

そう、神坂さんのことだ。それは先週までさかのぼるのだが…。

先週

―魔法科実習室―

「ねえ、小日向君」

「何？」

「私の相手をしてくれない？」

「相手…いいけど」

魔法は基本的に人それぞれ呪文も違いば特性、属性まで違う。人によってバラバラなのだ。

つまり普通の授業のようにクラス全員まとめて教えるなんて事は不可能である。

よって魔法科の実習では前半を個人の鍛練、後半を二人一組の模擬練習に当てている。

「それじゃ、準備はいい？」

「ああ、いつでも」

お互いにワンドを構えて対峙する。

雄真たちが戦り合うことを知ったクラスメイトも自分達の手を止めて見学している。

何せ今や二人は魔法科1年のNo.1、No.2だ（ちなみにNo.3は杏璃）。

今まで直接対決をしたことが無かっただけにクラスだけではなく先生方も様子を見守っている。

「先手は打たせてもらおうわ！エル・アムダルト・リ・エルス……デ
イ・ルテ・エル・アダファルス！」

春姫の杖から炎が襲い掛かる。

「セレス…いけるか？」

「はい、打ち消します」

「バニツシュ」

「な!？」

杖を振りかざし炎を振り払った。

「その程度じゃ俺には届かないぞ？」

「やるわね…でも、これならどう？」

エル・アムダルト・リ・エルス……ディ・ルテ・エル・アダファルス

「また同じ手か…無駄だと」

「デイ・アストウム・アダファルス！」

直線に飛んできた炎が突如軌道を変え複雑に動きながら雄真に襲い掛かる。

「っ！セレス！」

上からの攻撃はバックステップでかわし、正面はセレスで振り払い左右は障壁で防御する。

後ろからの攻撃はセレスの制御による魔力弾で打ち落としていった。

「……………」

「はぁ…はぁ…」

今まで苛烈に仕掛けてきた弾幕が突如やんだ。

「…なんで攻撃してこないの？」

そう、牽制程度に魔力弾を放ってはいるが未だに雄真は攻撃らしい攻撃はしていない。

「答える必要はないな」「真剣にやってよ！」

「なら、俺に攻撃せざるおえないような状況にしてみる」

「いいわ…なら覚悟してね」

エル・アムダルト・リ・エルス…

春姫の杖に高密度の魔力が収束していくのが分かる。

「あれは…！？ちっ、セレス…解放だ…」

「よろしいのですか？」

「今の状態でアレを止められると思うか？」

「……分かりました。しかし、2割ですよ」
「十分だ」

「解放…出力20%…」

- 春姫 side -

「なに…？」

集中しているから気づきにくいけど小日向君の魔力が今跳ね上がった？

「少しはやる気になってくれたようね…」

私はさらに集中力を高め魔法の発動に備えた。

- 雄真 side -

神坂さんのあの魔法はおそらく…光。

世界でもごく一部の人間にしか扱うことのできないレア属性…。

普通の魔法なら簡単に力負けしてしまうだろう。

なら…光と真つ向から対抗できる魔法を使うしかない。

光に対抗できるのは同じ光か…もしくは相克する闇…。

「セレス…サポートは任せた」

「はい」

「デイ・ソル・アルステラ・レイヴ…」

「…デイ・ルテ・カルティエ・エル・アダファルス！」

「アーシュ・アル・テ・リディナス！」

春姫から放たれた純白の光、そして雄真から放たれた漆黒の闇。
相反する二つの力がぶつかり合い対消滅する。

……

二つの魔法がぶつかりあった後、クラスメイト全員はおろか先生さえ一言も発せず、実習室が沈黙に包まれた。
その沈黙を破ったのは雄真。

「先生…体調が悪くなったので保健室に行ってきます」

「……あ、はい」

実習室から雄真が出て行った後、春姫のもとにクラスメイトが殺到したのは言うまでもない。

ー保健室ー

「っ！」

保健室につくなりいきなりベットの上に倒れこむ。
幸い保健室には誰もいないようだ。

「マスター！大丈夫ですか!？」

「ああ……心配ない。今回は一発だけだしな」

「しかし……」

「それに……お前が制御をしつかりやってくれたおかげで俺の負担は
かなり少なくなっている」

「膨大すぎる魔力ですか……」

「ああ……強すぎる力は制御ができない……。だから俺はおいそれと魔法を使えない」

「だから私を…いえ正確に言えば私の核となったこの石を作られた…」

セレスに付いている蒼い石を触る。

「ああ、この石のおかげで力は極端に弱くなったが俺の負担は無くなった」

そう、セレスを作るときに使ったあの石は雄真の強大すぎる魔力を封印したものだのだ。

「それに、この石でお前を作ったことで多少だが封印を任意で解放することができるようになった」

「それが逆にマスターの負担を増加させる原因に繋がったわけですが…」「そう言うな。お前のおかげで魔法の制御がある程度改善されたことも事実なんだから」

「マスター…」

「さあ、俺は寝るから昼休みになったら起こしてくれ」

………

―魔法科―

昼になり、教室に戻るといきなり杏璃が突っかかってきた。

「雄真！あんた今まで何処行ってたのよ！」

「どこって…保健室だけど？」

「保健室ー！？あんたねえ！」

「杏璃ちゃん！」

「な、なによ……」

「ちよつと小日向君と話があるから外してもらえる？」

「……分かったわよ」

そう言つて（渋々ではあるが）俺達から離れていく。

「……それで、話つて？」

「ここじゃなんだからついて来て」

「ああ……」

――中庭――

他の生徒は食堂か教室で食べているらしく、この時間帯は中庭には俺達以外だれもいなかった。

「それで話つて？」

「単刀直入に聞くけど、小日向君が実習のときに使つた魔法……あれは闇の魔法よね？」

やはり気づいたか……失敗したな。

「……」

「どこで教わつたの？」

「答える必要はないな」

「小日向君！真面目に答えて！」

「なら逆に聞くが、お前の使つた魔法は光の魔法だよな」

「……そうよ」

「誰から教わつた」

「……みなぎ すずり御薙鈴莉先生よ」

御薙……………なるほど、あの御薙か…。

「それで…、誰から教わったの？」

まあ、御薙の弟子なら教えても構わないか…。

「天堂桜花だ」

「な！？天堂って……。あの天堂？」

「さあな…これ以上は話すことはないだろうから俺は教室に戻るよ」

「ま、待ちなさい！まだ話は…」

「これ以上俺が話す義理も理由も気もない」

「……………」

―今現在―

・魔法科・

ということがあって、今現在非常に気まずい…。

「……………」

「……………」

不穏な空気を察してかクラスの連中も二人には話しかけられずにいた。

ただ一人を除いては。

「あんた達なんかあったの？」

さすが杏璃空気y(ry

い、いや…二人の友達だけはあって臆せずに話すことができるよ
うだ。

「いや、別になんにも」
「……………」

雄真はなんともないように見えるが、春姫は完全に無言。

「はあ……。何があったか知らないけど早く仲直りしなさいよ」

「別に喧嘩したわけじゃないんだが……」

「そうなの？」

「ああ」

「別に喧嘩したわけじゃないから心配しなくても大丈夫」

「ならいいけど……」

納得してはいないがこれ以上は聞き出せないと判断したのかその後聞いてくることはなかった。

第四話（前書き）

今回からオリキャラ入ります。
設定などはまた後ほど。

第四話

1 9月上旬1

- 魔法科 -

それは突然だった。

「今日は転校生が来ている」

担任のこの一言でクラスが騒ぎ出す。

「……………」

雄真は無関心に窓を眺めていたりするが。

「転校生…こんなタイミングで？」

杏璃の言うことはもつともである。

普通、転校生が来るなら2学期が始まる初日だろう。
それが2学期が始まって1週間も経っている今来るのは不自然だ。

「入ってこい」

先生に呼ばれて入ってきたのは女の子。

「うおおおおおおお！……………」

しかも男子陣が騒ぎ立てるほどの美少女だった。

「自己紹介してくれ」

「はい。天堂綾てんどうあやと申します。よろしくお願いします」

「……………ん？天堂…？」

雄真が正面に顔を向けるとちょうど綾と目があった。

「
」

雄真と目があった瞬間に満面の笑みを浮かべる女の子。
当然クラスの男子には面白くないことで…。

「またあいつか…」

「神坂さんや柊さんだけでなく、今度は転校生の子まで手を出す
か！」

「いつかあいつを呪い殺して……………」

なんて聞こえているがあえて聞き流そう、どうせ連中には何もでき
まい。

そんな事より前方の少女である。

「お前…まさか綾か！？」

「はい。お兄様」

……………

「はああああああ！……………！！……………！！……………！！……………！！」
「あ……………なんだ、
小日向と知り合いか、なら天堂のことは小日向に任せる」
「ちよっ！何言って……………」

何だかんだでその場の勢いに流されてHRが終った。
雄真の右隣の席に（元々座っていた女子を無理やり退かして）座り
終始笑顔の綾を見てため息をつく雄真。

1 時間目 魔法理論1

魔法理論の授業ではあるが雄真は授業を無視して綾と（他の生徒の
邪魔にならないようにするため）筆談で会話をしていた。

「……………」

当然雄真たちが聞いてないことは先生も気づいているのだが、注意
できない。

一学期の終わりに近代魔法理論についてというテーマでレポート用
紙十枚以上という地獄のような宿題を出した鬼のような先生なのだ
が、雄真はそれを学会発表レベルの内容でレポート用紙124枚と
いうとんでもない量と質のレポートを提出。

（もちろん先生には半分も内容が理解できていない）
また定期テストも10分で途中退出したにも関わらず100点満点
というありえない結果を出したのだ。

下手に注意をしたら魔法理論に関しての無理難題な質問をされる（
その上解らないと答えればわざわざ黒板で解説するという用意周到
ぶり）ことが一学期で嫌というほど味わっているのである。

そんな訳で雄真は最初からいなかったかのように授業を進めている
のだ。

（それでお前はなんでこっちに来た？）

（お兄様に会うためです）

即答、しかも文字に音符までつけるなど心で突っ込みを入れつつ会

話を続ける。

(桜花さんの差し金か?)

(1割正解です)

嫌な予感をしつつも続きを聞いてみる。

(…残りの9割は)

(お兄様に…(ふざけるな))

(あつ…本気なのに……8割は)

8割は俺に会うためか…。

(残りの1割は?)

(……あの馬鹿です)

突然綾の顔色が悪くなる。こいつがこんな顔をするときは決まって実兄のことに関する話をしていているときだ。

こいつは実兄が世界で一番(殺したくなるくらい)嫌いだと公言している。

ちなみに雄真が世界で一番(狂いたくなるくらい)好きだと公言している。

下手するとヤンデレであるが、今のところその兆候はでていない…
…今のところ。

(あいつか…ここに来ているのか?)

(……はい)

また問題が増えたことにため息をつきたくなる雄真だった。

「で、二人はどういう関係なの？」
「……………」

昼になり杏璃に（強制的に）Oasisに連れて来られ、綾のことについて尋m…もとい質問をされている。

「どういう関係って…」

「お兄様は私の全てです」

「はあ！？」

「おい！」

いきなり爆弾発言キター！！

周囲の男共の殺意のこもった視線はこの際無視だ。

「雄真あ！！どういうこと！？」

「こいつとは魔法の師が同じってだけで…言ってみれば兄弟弟子みたいなものだ！」

「魔法の師がおなじ…それって天堂桜花さん？」

「あ…まあ…」

天堂桜花…魔法界においてその名を知らない者はいないであろう天才。綾の実母にして俺達の魔法の師でもある方だ。

「それで…雄真が全てってのは？」

「言葉のとおりです」

「お前は少し黙ってる…。まあ…過去にいろいろあってな、それだからのブラコン？になっちまったんだ」

気が付いたら雄真たちの周りを男共（何故か呼んでもいないのに八チまで加わっていた）が取り囲んでいた。

「もてる男には死を！」

「もてる男には死を！」

八チの言葉に合わせて男共が声高らかに叫ぶ。

「……………」

これ、絶対営業妨害だよなー。とか思いつつももはや何も言葉が出てこない雄真。

「死？……………誰に死を与えるつもりですか…？」

「やば！セレス！！！」

綾の異変を感じ取った雄真は直ぐにワンドを構える。

「柎！神坂さん！全力で障壁を張って！！！」

「はあ？」

「何を言ってる…！」

「いいから早く！！！」

雄真に言われ渋々ながらも障壁をはる二人。

「間に合えよ…！」

言いながらOasis全体にも結界を張る雄真。

「なんだ！？だが、気にするな同士諸君！我々は聖戦^{ジハード}によって憎き

雄真まおつをこの世から消し去るのだ!!!」
「YES、MY LORD!!!」

某ブ タニア軍兵士のような返事を返した男共は包囲を縮めながら
(魔法を使える生徒は)ワンドを構える。

「そつ……あなたたち……死にたいのね……」

良いわ……殺して……あげる

ジャラジャラ…

「ん、何の音だ?」

ジャラジャラジャラ

「近づいてきてる?」

ゴゴゴゴゴゴッつという地響き共に鎖を地面で擦ったような音が聞
こえてくる。

「ちよつ!お前、こんなところでそんなもの使うなよ!」

「ふふふつお兄様を侮辱するものには等しく死を……」

聞いてねえ……。

ジャラジャラジャラ!

「な、なんだあれは!」

「まったく…なにやってるのよあんだ…」

「誰!??ってお姉様!」

「……………」

「やつほー。雄真、綾」

「…誰」

話についていけなくなっている神坂さん達。
とりあえず自己紹介だけでも進めなければ…。

「えーつと…綾のお姉さんで名前は…」

「天堂椿よ。よろしくね」

「お姉さん…ですか」

「そ、よろしくね春姫ちゃんに杏璃ちゃん」

「ちゃん…いや、まあいいですけど…」

「それよりなんで私達の名前を知っているんですか?」

「なんでって…聞いたからよ」

「聞いたってまさか…またアレですか…」

「そういうこと」

「あれって?」

「と・う・ち・よ・う・」

「…はい?」

その後全員に椿さんの(困った悪癖の)説明をするのに苦労した。
彼女は盗撮や盗聴が趣味でしかもそこいらのプロ(?)顔負けの腕
前なのだ。

たまに首相官邸やホワイトハウス、果てはFBIやらCIAにまで
盗聴、盗撮していたりする。しかも一度たりともばれた事はないと
いう…ありえない。

アメリカの極秘情報(通称Xファイル)を見せられたときは顔が青
くなった、いやマジで。

「とうとう」とでよろしくね」

こうして新たな仲間が加わった（RPG風に）。
あんまり嬉しくないのは何故だろう…。

放課後 屋上

その日の放課後に雄真と綾、椿の三人は屋上に来ていた。

「で、椿さんが来たのはあいつが来たからで間違いですね」

「うん、そうだよ」

「あの馬鹿の目的はやはり…」

「こちらお兄さんを馬鹿呼ばわりは感心しないぞ」

「いいんです。自分に才能がないからと八つ当たりするような奴は馬鹿で十分です」

やっぱりか…綾の兄嫌いも相当だよ…。事情が事情だから仕方ないとはいえ…。

「はあ…雄君は、分かっているよね？」

「はい。ただ綾の気持ちも分かりますから」

「そう、分かった。私があつちを見てるから雄君は綾をお願いね」

「はい」

「それじゃ私は戻るから」

そう言って椿さんは屋上から出て行った。

「なあ…」

「何ですか？」

「いや…なんでもない」

兄妹仲良くなんて考えが浮かんだが口にはしなかった。

「そうですか。では私も戻りますがお兄様はいかがなさいますか？」

「俺はもう少しここにいますよ」

「分かりましたではまた明日」

「ああ、またな」

……

綾が戻り一人になった屋上で雄真は誰も居ないはずの場所に声をかけた。

「そろそろ出てきたらどうだ？」

すると雄真が声をかけた場所から空間が歪むようにして一人の少女が姿を現す。

「…いつから気づいていたの？」

「最初から。ついでに椿さんも気づいていたようだな、綾は微妙だが」

「そう」

「しかし覗きとは趣味が悪いな」

「別に…覗きたくて覗いたんじゃないわよ」

大方始めからここにいたんだろう。

俺達が屋上に来ることに気づいて慌てて隠れたってところか。

「それで、なんか聞きたいこともあるのか？」

「……………」

少しの間戸惑うように黙っていたが直ぐに口が開く。

「闇の魔法と天堂家の人との関係について」

「それは御薙鈴莉先生に頼まれたから？」

「違うわ……………ただの興味よ」

嘘だな。まあ、話してもさほど問題はないか。

「…神坂さんは魔法ってなんだと思う？」

「魔法？」

「そう魔法は何のためにありどういう風に使われるべきか」

「魔法は…人々を幸せにするためのもの」

やはりな…だろうと思った。

「俺にとっては魔法とは道具だ」

「……………」

「幼い頃、あるとき魔法を使ったことがあって、そのとき魔法が暴走した」

「暴走……………」

「ああ、俺は普通の魔法使いよりはるかに許容魔力量が多くてね、しかも制御が殆どできてない。そんな子供が魔法を使ったらどうなるか想像がつくでしょ」

「ちょっと待って、小日向君の魔力って300もいってないはずじゃ……………」

「ああ、アレは封印してる時の値だから」

「封印？それって……………」

「あまりにも魔力がでか過ぎて制御できないから魔力を封印してる

んだよ。魔力放出の量を制限してるの、簡単に言えば水道の蛇口と一緒に」

水道の蛇口を壊したことはないだろうか？水道の蛇口を壊すと物凄い勢いで水が出る。つまり俺の魔力も封印していない状態だと大量に放出されてしまう。

だからこそ蛇口（封印）を取り付けることでやっと制御できているのだ。

「なら…本来の値はどれくらいなの？」

「そんなことはどうでもいいだろ。それよりも、魔法を暴走させた俺はそれ以降魔法を使わなくなった。あの人に出会うまではな」

「それが天堂桜花さん？」

「ああ、あの人に出会ったことでいろいろと教わった。魔法の考え方とか、制御の仕方とか」

「だから師匠なんだ」

「まあ…闇の魔法もそのときに習った。元々素質があったことと魔力が高かったことが理由だけど。そんな頃に綾にも出会った」

「……………」

「闇の魔法と天堂家についてはこんなところだが、もう一つ教えてあげよう」

「もう一つ？」

「前の実習で神坂さんとやったときに俺が手を抜いてた理由」

「え？」

「さっきも言ったように俺は魔力の制御が致命的に下手でね、セレスを作ってからには多少はマシにはなったけどそれでも封印しているときの魔力を制御するのが手一杯なんだよ」

「じゃあ…」

「俺は本気を出さなかったんじゃないやなくて出せなかったんだ。神坂さんが光の魔法を使うから封印を一部解除して闇の魔法で相殺したけ

ど、あの後に制御仕切れていなかった魔力が体中に逆流して来てね、正直死ぬほど痛かった」

「ごめんなさい…私」

「気にしないでいいさ、神坂さんは事情を知らなかったんだし、俺が勝手にやったことだしね」

「でも…」

「それに、本来なら今日話したことは君に教えるつもりはなかった。たまたま話す気になっただけ」

それじゃと言いながら屋上の出口に向かう。

「待って！—っただけ聞いていい？」

「……答えられる範囲なら」

「子供の頃に女の子を助けた覚えはない？」

「さあ…覚えてないな」

ガチャンというドアが閉まる音が聞こえ一人屋上に残された。

「覚えてないか、否定はしなかったからもしかしたら…」

屋上から見えるグラウンドには野球部の姿が見える。そんな風景をみながら春姫は

「あの男の子にいつか会えるのかな…」

そう呟いた。

第四話（後書き）

えー、まずは楽しみにしていた（たいへん物好きな）方々。長らくお待たせしました。

約2ヶ月ぶりの更新です。

遅れた理由はリアルがめちゃくちゃ忙しい。

ただそれだけです。

いや、なんかもうグダグダですみません。

次の更新の目処も立っていませんが完結まではもっていきます。

未熟な作者ですがこれからもよろしく願います。

P・S・ 3月までは忙しいので遅くとも4月までには次を出します。

第五話（前書き）

現在オリジナルストーリーで進めています。

「原作のシナリオまだ？」な方、もう暫くお待ち下さい。
詳しくはあとがきで。

第五話

10月8日、放課後

―瑞穂坂学園 中庭―

「ふっふっふん」

一人の女子生徒が鼻歌を歌いながら中庭を通っていた。

「うん？どうしたんだろ」

「……………」

女子生徒は中庭の隅で踞っている男子生徒らしき不振人物（制服は瑞穂坂学園の男子生徒用の制服を来ているが怪しいため）を発見した。

「どうしました？」

その少女はあろうことかその不振人物に声をかけてしまう。

「……………」

声をかけてはみたが返事はなく、俯いたままのため顔も良く見えな
い。

「あの一……」

更に声をかけて顔を覗きこんでみようとしたとき、男子生徒が顔を

上げた。

「くくくっ中々の魔力じゃないか…」

「ひっ!」

顔を上げた男子生徒の顔は満面の笑み。

思わず一步下がる少女だが男子生徒は意に介さず更に続けて、

「キミの魔力をいただきます…」

そう言い少女に近づく。

「い、いや…」

生理的嫌悪か直感的に危険を察知したか、少女は嫌がり後に下がる
うと足を動かそうとするが、

「う、動かない…なんで!」

まるで金縛りにあつたように首から下が一切動かなかつた。

「無駄だよ…では、いただきます!」

「い、いやー!…!」

中庭に少女の悲鳴が轟いた。

10月9日

—瑞穂坂学園 理事長室—

「失礼します」

コンコンというノックと共に一人の女性が入室する。

「あ、いらっしやーい」

入室したのは長髪黒髪ストレートの美女。

迎え入れたのはメガネの美女。

どちらも美しく黙っていれば男達にモテるであろう。

話がそれたが、この場（理事長室）にふさわしくない言葉で迎え入れたメガネの女性が瑞穂坂学園理事長、高峰ゆずは（タカミネ ユズハ）。

入ってきた女性が魔法科教師、ミナギススリ御薙鈴莉。

「それで、鈴莉がここに来るなんて珍しいじゃない。どうしたの？」

「解ってるくせに……。新たな犠牲者よ。魔法科の2年生」

「そう：これで何件目だっけ？」

「5件目よ。犠牲者は全員魔法科生徒で3年生が3人、2年生が2人」

「共通点は？」

「全員が女子生徒だということ。あとは全員魔力が高いことね」

「……たぶん後者ね」

「でしょうね……。全員魔力を抜かれていたこと以外に外傷はなし。

乱暴された形跡もなしときたら犯人の狙いは……」

「魔力か……」

ゆずはの眩きと共に理事長室が沈黙に包まれる。

P i P i P i

無機質な電子音が鳴り響く。

「私の携帯だわ…。ごめんなさい、もしもし」

本来なら理事長室で携帯など持ったのほかだろつが、ゆずはも対して気にしてはいない様子。

そこから二人の親密さが伺える。

「ええ…ええ…分かったわ、それじゃそっちはお願い。ええ…じゃあ」

話が終わり携帯を閉じる鈴莉。

「どうしたの？」

「新たな犠牲者が出たわ…一年生の男子で魔力量なら学年で十指に入るそうよ」

「決定ね」

「ええ…」

はあ…と二人同時にため息をついた。

10月10日放課後

- 瑞穂坂学園 御薙鈴莉の研究室 -

- Side 春姫 -

コンコンとノックをすると共に中からどろどろという声が聞こえてくる。

「失礼します」

「よく来てくれたわ」

私を出迎えたのは私の魔法の師でありこの学園の魔法科教師でもある御薙鈴莉先生。

「先生、私に用事があるって聞いたんですが」

「ええ、神坂さんは最近噂になってる連続通り魔事件のこと知ってる？」

「はい、噂程度なら…。その通り魔に出会って魔力を奪われて意識を失うって、上級生の何人かが襲われたって聞きました」

「そう、犯人は不明で被害者は3年生が3人、2年生が2人、1年生が1人でいずれも一人で行動中に襲われたの」

「それで被害者の方は…」

「大丈夫。魔力が抜かれた以外に変化は無かったし、検査しても何もなかったわ」

ここまで言われれば気付く。

今回呼ばれた訳は…。

「そうですね…。それで私はどうしたらいいんですか？」

「話が早くて助かるわ。神坂さんには調査をしてもらいたいの」

「調査？犯人を捕まえるんじゃないんですか？」

「そんな危ないこと頼まないわよ。神坂さんは生徒達の様子を見ていてもらいたいの」

様子を見る…つまり生徒の中に犯人がいるかもしれないから私が監視しろってことね。

「分かりました」

「いい、くれぐれも犯人を見つけたら単独では動かずに私や他の魔法科の先生を呼ぶように」

「はい」

それと…と先生が続けて何か言いかける。

「…先生？」

「その…最近小日向君はどうしてる？」

「小日向君…ですか？」

何故小日向君のことを気にかけるのか…先生は私達の魔法学の授業を受け持っている訳ではない、小日向君と先生との間に接点などないはず…。

そう考えて思考を打ち切り屋上で出来事を話す。

「そう…そんなことが…」

「あの、先生と小日向君はどういった関係ですか？」

「ん？親子」

………

「え、えええええええ——————！！！！！！！！！！」

「せ、先生と小日向君が親子！？で、でも名字とか違いますよね！？」

「冗談よ」

「え？」

「からかってみただけよ」

「な、なんだ…冗談ですか…」

そつだよね。親子なんてそんなはず…。

「さ、もう話は終わったから帰りなさい」

「あ、はい」

私は立ち上がり先生の研究室を後にした。

「今さらどの面下げて母親ですなんて言えるのよ…」
扉が閉められたあとに呟いた鈴莉の呟きは春姫に届くことはなかった。

- Side 雄真 -

―天堂家―

俺は今綾の家つまり天堂家に来ている。

「…それで？」

「いやーあはは…。逃げられちゃった、てへっ」

俺の目の前の少女に見える女性。この方が天堂家現当主、天堂桜花
その人だ。

身長は150を切り見た目はどう見ても中学生。ロリそのものにか
が見えない。

「……………」

「ごめんなさい」

「はあ…。天堂桜花ともあろう方が何をしていたんですか…」
「だって…。あの子が話があるっていうから行ってみたら部屋の中に設置式魔法陣が敷き詰めてあって、魔方陣の無力化に足を止められてる間に逃げちゃったんだもん！」

はあ…はあ…。と息を切らしている桜花さん。言いきるのにそんなに体力使ったのか。

正直可愛い、思わず頭を撫でてしまいそうになるのを我慢。

「分かりました…」

「分かってくれた!？」

「なんでそんなに驚くんですか…」

「だって…いつもなら怒ると思つてたんだもん…」

上目遣いに涙目。この人は本当に…。

撫で撫で。

「ふにゃ〜」

「…お兄様?」

「っ!?!あ、綾…」

「…何をやっていたんですか?」

マズイ、思わず桜花さんの頭を撫でてましたなんて言ったら死亡フラグだ…。

「い、いや…桜花さんの頭に糸屑がついてたから払っただけだから」

「…本当ですか?」

「ほ、本当だって!お前は俺のこと信用できないのか!？」

「…わかりました。お兄様を信じます」

フラグ回避…危なかった。

「話は戻りますが、それで脱走したのが分かったから椿さんを送ってきたわけですか？」

「うん、あの子なら貴方達にも彼にもいいと思ったから」

……

その後、桜花さんと雑談をしながら夕食をごちそうになり（すももには友達の家で食べてくると連絡済み）家に帰った。
結局、核心部分は聞けなかった。

第五話（後書き）

ここまで読んでいただき誠にありがとうございます。

前回あとがきで最悪4月になるかもとか言っておきながらまだ1週間も経たずに更新です。

自分の適当さ加減には呆れますが、目をつむってやって下さい。

さて、前書きにも書きましたが現在…というか最初からオリジナルストーリーで進んでいます。

雄真達が1年生ということもあって原作ヒロインでも未だに登場してない方がいます。

伊吹、沙耶ファンの方、もう少しお待ち下さい。

2年生になった時点で原作のシナリオにそって進めますのでそのときまでお待ち下さい。

ビサイム、サンバツハファンの方、マニアックですね…。

止めはしませんが。

信哉、風神雷神は…いいか。

鈴莉、音羽ファンの方、いいですね。ゆずはも入れて雄真君と4P

（検閲により削除されました）。

準に命を捧げている方々、ごめんなさい出番は期待しないで下さい。作者は準が嫌（殴

どこからかパトリオットミサイルキックが飛んできました。

グダグダなあとがきですが、最後まで読んでいただいております。

ございます。

次の更新は未定です。

近い内に更新すると思いますが当てにしないで下さい。

今回は間章ということで過去編です。

では、次回もよろしく願います。

間章 - 始まりの記憶 - (前書き)

過去編第一段。

綾視点の物語。

間章・始まりの記憶・

「つまらない日常」

よくテレビとかで聞く言葉。

私は思う…その日常こそが“何よりも大切”なんだと。

- Side 綾 -

- 8年前 天堂家 -

「…もう一回」

「はい…」

私は物心ついた頃から魔法を教わってきた。

それは、天堂家の跡継ぎとしての義務のようなものであり、失敗しては怒られてを繰り返していた私にとっては苦痛でしかなかった。

私の母は魔法の名家として私を鍛えていたようだけど。

「何度繰り返すの！魔力を放出して手のひらに留める。それだけのことよ！」

「ごめんなさい…」

母は普段は優しい人だ。でも、魔法使いとしての母は人が変わったように厳しくなる。

私はこのときの母は大嫌いだ。

「はあ…今日はここまで。明日までに出来るようにしておきなさい」
「はい…」

忙しい人だつてことは分かつてる。
母が私に厳しくするのは私に期待するからだつてことも分かつてる。
でも、子供だつたころの私は母親の愛情に貪欲だつた。
父親がいなかったせいかもしれない。
父は私が生まれて直ぐに亡くなつたと聞かされた。
優秀な魔法使いではあつたが、元々病弱だつたらしい。
そんな私にも安らげるときがある。

「綾、大丈夫？」

「お兄ちゃん……」

私の兄、てんとうしゅうごいち天堂翔一。

いつも怒られてばかりの私のことを常に気にかけてくれる大好きなお兄ちゃんだ。

「お兄ちゃん……うわあああんんん！」

「よしよし……いい子だから泣かないの。綾は泣き虫なんかじゃないよね？」

「うん……」

お兄ちゃんは私とは違い厳しい訓練はされてなかつた。

当時の私には理解できなかつたが、天堂家の当主としての才能がなかつたからある程度自由にさせていたようだ。

私達の元に男の子がやって来た。

「翔一、お前これでいいか……綾」

「……………」

私達二人の間にやって来たのは小日向雄真。最近家で魔法を習つて
る男の子だ。

私はこの男の子が苦手だった。話しかけても「うん」とか「ああ」とか「いや」しか言わないし、ときどき空を見てただぼんやりしているような変わった人だ。

そのくせ魔法理論は砂漠の砂が水を吸い込むように物凄い早さで覚えていく。実技は属性魔法以外は完璧だった。

子供ながらに解ってしまった。この人には一生勝てないと。

当然母は彼ばかり褒めるようになる。母を取られたように感じた。だから私は彼が嫌いになった。彼にしてみれば八つ当たり以外の何物でもないがそれでも止められなかった。

「ありがとう雄真」

「綾も飲むか？スポーツドリンクだが…」

「……………」

彼がジュースを渡してくる。

兄は素直に受け取るが私は手で弾き落とした。

「綾！」

「……………」

「いいよ。気に入らないなら気に入らないってはっきりいって。その方がこっちも楽だから」

「雄真…」

「悪い。邪魔した」

そう言って彼は家に戻って行った。

「…綾。どうしていつも雄真を嫌うんだ。ダメじゃないか」
「……………」

言われなくても分かっていた。兄や彼の方が正しいことくらい。

ただ、感情は止まらなかった。

悔しかった。同い年なのにどんどん先に行く彼といつまでも足踏みをしている私。

一年も経つとどうしようもない差ができていた。

……

ある日、兄が家から消えていた。

家の者全員で探したが見つからなかった。消えてから3日が経とうとしていた日、近くの森で探していた私の前に兄はいた。

「お、お兄ちゃん！」

思わず兄の下へ駆け寄るが、

「リ、セイル」

「え……。う、ぐ……」

気付くと同時に魔法が直撃していた。

兄が良く使っていた風の魔法。

詠唱を短縮していたためか威力は低いが私の腹に当たっていた。

「痛っ…な、なに…？」

思わず踞る私だが顔を上げて兄を見ると。

「お、お兄ちゃん…?」
「……………」

私に冷たい目を向けながら杖を突きつける兄の姿。

「綾…悪いが、ここで死んでもらう」
「い、いや…」

何故、なんで、どうして、そんなことばかりで考えていて肝心の回避行動を怠る始末。

「…リ、セイ…ぐっ」
「え…?」

突然吹き飛ぶ兄とただ呆然としている私。

「堕ちるとこまで堕ちたな…翔一」
「……雄真あ！邪魔をするなあ！！！」

「リ、アラステル、ラ、セイレス、ルーア！」
「エル、アルザス、クリア」

二人の魔法。片や完璧な詠唱と完全な制御、片や短縮した詠唱と不安定な制御。

間違いなく兄の魔法が勝つ。私はそう核心していた。

魔法がぶつかるまでは。

「な!？」
「……………」

結果は私の予想を大きく裏切った。
いかに質のいい魔法でも圧倒的な物量には勝てない。
不安定な魔法でも桁違いの魔力が籠った魔法は兄の体をその魔法ごと吹き飛ばした。

「分かっているだろ…お前に魔法の才能はない。綾を殺したところでその才能は手に入らない」

「…うるさい」

「当然俺に勝てるはずもない」

「うるさい！」

「なら、覚悟はできているな？」

「うるさい！！！！お前も、綾も殺してやる————！！！！」

「っっ！」

息を飲む。それは初めて聞く兄の本心だった。

才能を持つ私（妹）に対する兄の嫉妬。

私はただ甘えていたのかもしれない。

兄に、母に…そして彼にも。

それは子供だからと片付けることはできるけど、決して消えること
はない私の記憶^{トラウマ}

その後のことは覚えていない。

ただ耳を塞ぎ目を閉じて時間が過ぎるのを待っていた私は彼に抱かれて屋敷まで運び込まれていた。

そして時は過ぎて現在。

- 天堂家 綾の部屋 -

身支度は整えた。忘れ物はなし。

「さて、いきますか」

今日も通う、彼に会うために。

私を救ってくれた私の大切な…。

「おはようございます、お兄様」

間章 - 始まりの記憶 - (後書き)

今回は過去編ということで綾の回想形式の文にしてみました。

この過去編、あと2回予定してます。

ただし、残り2回はネタバレになるので暫く後になったら出す予定です。

次回は第六話です。

第六話（前書き）

今回は前半が事件の調査、後半は杏璃の特訓です。

第六話

- 瑞穂坂学園 魔法科 -

「それじゃ、行くわよ雄真！」

「は？」

昼休み、Oasisにでも行こうかと思っただ俺はいきなり意味不明な杏璃の一言に固まった。

「は？じゃないわよ！犯人探しに決まってるでしょ！」
「……………」

ああ…頼みの綱の神坂さんまで巻き込まれて目線が明後日の方向に向いてる…。

「杏璃…意味不明だから一から説明してくれ」

「最近、魔法科の生徒が襲われてる事件があるでしょ？」

「ああ、あるな」

「それを解決しに行くのよ！」

「なんで？」

「なんでもかんでもないの！ほら、さっさと行くわよ！」

……………

で、今に至ると…。

「なにぶつぶつ言ってるのよ」

「気にするな。若干現実から目を背けてただけだから」

「あ、そう。そんなことよりまずは情報収集ね！」

「情報収集ね…。具体的に何を調べるんだ？」

「当然犯人の手がかりよ！」

「つてことは先ずは現場かな？」

「そうね。生徒が襲われた場所を順番に見ていきましょう」

・校舎裏の森・

「第一の事件が起きた場所がここ」

校舎裏の森に来た雄真達。辺りを見渡すが…。

「何も無いな」

「まだ探してないでしょ！とにかく探すわよ」

……………

暫く探してはみたが手がかりになりそうなのは無かった。

「ないわね…」

どうやら杏璃も収穫は0らしい。

「お待ちせ」

「春姫、どうだった？」

「ちょっとこっちに来て」

何か見つけたらしい。二人でついていく。

「これ…」

そう言っつて春姫が指を指した先には、木に何かで切つた後のような後が残つていた。

「なんだろ…これ」

「鋭利な刃物か何かで切つた後だと思っただけど…」

「これだけじゃ分からんな」

「そうね。一旦戻りましょう」

……

学園に戻る途中、気になったことを聞いてみた。

「そもそもなんでこんな所に一人で来てたんだ？」

襲われたのは3年の女子生徒らしいがあんな所に一人で来ていた意味が分からない。

「襲われた生徒は化学部の部長らしくて、主に魔法と化学の融合をテーマにしていたらしいの。それで実験のための材料に必要な薬草とか魔法茸を森で採っていたらしいわ」

「詳しいな」

「…御薙先生から教えてもらったの」

「御薙先生に？」

「うん、先生達も今回の事件を調べてるって」

「ふーん…」

普通そんなこと一般の生徒が知るはずがない。おそらく御薙先生に言われて動いてるのだろう。

「次行くわよ」

杏璃の言葉に頷き後ろからついていった。

・体育館裏・

「ここね…」

「で、なんで体育館裏なんだ？」

「襲われた生徒が3年生の女子で、彼氏と一緒にここに来て話していたらしいの」

…つまり

「彼氏とイチャラブしていたら襲われた…てことか？」

「…そういうこと」

さすがの神坂さんも呆れていたらしい。

「二人共さつさと調べるわよ！」

「はいはい」

生返事を返しながら辺りを調べ始めた。

………

辺りを調べていて気づいたのだが…。

「マナが極端に少ないな…」

「マスター」

「なんだセレス」

「マスターの正面から見て3時の方向1mの場所を中心として半径約4mの範囲のManaが消滅しています」

<Mana:魔法を使用する際に使用する自然エネルギー。このManaを体内に取り込み魔力に変換することで魔法を使用できる。>

セレスに言われた場所に立ち辺りを見渡してみる。

「…変だな」

「はい、周囲のManaがここに流れ込んで来ません」

大規模な魔法を使用した後などにこのようなManaの不足が起きることとはある。

しかし、たとえManaを使いきったとしても周りからManaが流れ込んでくるため数時間もすると元通りになる。

にもかかわらず周囲からManaが流れ込んで来ない。

例えるなら水面にぽっかりと穴が空いているような不自然さ。

周囲の水が穴に流れ込まずに穴が空いているのである。

自然の摂理に反した矛盾。

間違いなく人為的な仕業だろう。

「さて…他には何もなさそうだな」

未だに調べているであろう杏璃達のもとへ戻っていった。

- 魔法科 教室 -

「結局…犯人の手がかりになりそうな物はなかったわね」

「そうだな…それより昼飯食う時間がないんだが…」

昼休み残り10分。今からOasisに行っても何も食べられないだろう。

「しょうがないわね…。私の分けてあげる」

「え？」

杏璃の弁当…嫌な予感しかしないんだが…。

「何、その反応…」

顔は笑っているが声は笑ってない。

「な、何でもありません…」

「わかればよろしい。はい」

そう言って渡されたのは…。

「……………パン？」

「そうよ。どうせあんたのことだから昼抜きにしそうだったから最初から買ったよな」

以外に面倒見がいい杏璃。しかし、最初にあちこちつれ回したのはそちらだったよな…。

「何、いらなの？」

「いえ、有り難く頂戴いたします」

杏璃の以外な一面を垣間見た昼休みだった。

- 魔法科 -

放課後になり、帰って寝ようと思いつつながら帰ろうとするところ……。

「雄一真！」

「……………」

杏璃に邪魔をされました。

……………

「で、何すんの？」

杏璃に連れられて（クラスの連中もドナドナとか歌ってた）魔法科の実習室に来たわけなんだが。

「ちよつとね……。魔法の練習に付き合ってほしいの」

「練習？何でまた……」

「12月に昇級試験があるでしょ？そのためよ」

「ああ……」

魔法界は毎年7月、12月の2回昇級試験を実地している。

魔法科に入学した時点でclass Cが与えられ、決められた場所（安全を確保した結界内か、フィールドclass B以上の魔法使い同伴のもと）で魔法を行使できる。

（簡単に言えば車の仮免許みたいなもの）

Class Bから一人で使えるようになるため、これが魔法

科の卒業条件にもなっている。

卒業までに取りれなくても卒業はできるが、卒業後3年以内に取りれないと卒業資格を剥奪されるため、魔法科の生徒（特に現3年生は）死に物狂いで取り組んでいたりする。

ちなみに1年生は全員参加（落ちること前提）で受ける。

会場の雰囲気とかを知っておくために一度受けさせるのだ。

約5年に一度くらいの割合で1年で受かる強者つわものもいるが。

「だから雄真に見てもらいたいの、雄真そついうの上手いでしょ？
実習でもクラスの皆に教えてたし」

「まあ、いいけど…。じゃあ、とりあえずいつものようにやってみて」

「うん」

そう言つて杏璃が取り出したのはキューブと呼ばれる棒状のもので、それを立方体の形に組み立てていく。

キューブ内に魔力を込め、それを拡散しないように維持し続けることで魔力の収束と維持を同時に特訓できる。

「じゃあ始めるわよ」

「ああ」

杏璃から少し離れた場所で様子を見守る。

「うー…」

杏璃が集中し始めるとキューブの中で魔力が収束していく。

「くっ！」

杏璃が顔をしかめると同時にキューブが弾けた。

「あー…失敗か」

「杏璃、もう一回やってみてくれ」

「分かった」

キューブを組み立て直して再び集中し始める。

……

何回か同じことを繰り返させてからキューブを貸してもらい。

「見ている」

キューブを組み立てて魔力を込めた。

「凄い…」

杏璃が思わずため息をつきたくなるほどの早業だった。
ほんの2、3秒でキューブの中で魔力が収束し完全に安定しているのだ。

「杏璃と俺の違い、分かるか？」

「……………」

「分からんよな…」

「わ、悪かったわね！」

「別に責めてないさ」

キューブ内の魔力を拡散させ、キューブを解体する。

「それじゃ、今度は右手と左手同時に同じことをやるからその違いを見てくれ」

両手に意識を集中させ魔力を収束させていく。

「……………あ」

右手の方は安定していたが、左手の方の魔力がぶれて不安定になっていた。

「違いが分かった？」

「うん…。左手の方が不安定だった」

「そうだな、じゃあ何で不安定だったと思う？」

「……………」

分からんか…。

「主に2つ理由がある。一つ目が方程式の違い」

両手にそれぞれの魔力収束に使った方程式を出現させる。

「…左手の方が荒いわね」

「そうだ。方程式は細かく、洗練されていた方が魔力を制御しやすくなる」

「じゃあ、私の方程式は荒いってこと？」

「まあな、ただ細かければ良いってもんじゃない」

「どういうこと？」

「魔法は土台となる“魔方陣”、それを細かく調整する“方程式”、最後に魔力を制御する“イメージ”の三つで決まる」

「授業で習ったやつね」

「ああ、魔方陣はほとんど変えようがないから重要になるのは方程式とイメージだ」

「うん」

「簡単に言えば魔法は最初に組み立てた方程式と魔法のイメージで決まる。で、右手で作ったやつは8割方程式で作って残りの2割をイメージで補った。対して左手の奴は6割が方程式で残りの4割がイメージだ」

「つまり…イメージと方程式の割合の差ってこと？」

「杏璃の一番の欠点はな。ただ今から方程式を教えても無駄だろうしな」

方程式は理論だ、授業中寝てるような杏璃に教えたところで付け焼き刃にしかないだろう。

「悪かったわね…」

「だから杏璃にはイメージの方を教えた方が効率がいいな」

「イメージって何をするの？」

杏璃にキューブを渡して。

「杏璃はキューブに魔力を込めるときどうしてる？」

「？普通に中に入れ込む感じで…」

「それじゃ駄目だ。キューブは四角形だろ？でも魔力を収束させるときは球体をイメージしてやるんだ」

「球体？」

「ああ、魔力を丸い玉にする感覚で徐々に小さくしていくようにやるんだ」

「分かった」

そして魔力を収束させると…。

「で、できた…」

見事に魔力が収束し、安定していた。

「できたな」

「やった、ありがとう雄真！」

「馬鹿、集中しろ！」

「あ…」

そしてキューブは弾け飛んだ。

……………

暫く様子を見ていたが、完全にできるようになったため今日は終わりとなった。

「ねえ、雄真」

「なんだ？」

片付けをしている最中に杏璃が話しかけてきたためそちらに向く。

「私と春姫ってどっちが強い？」

少し考えて…。

「実戦という意味なら春姫だな」

「そう…」

そこで「だが」と付け加えて

「才能って意味なら杏璃の方が上だろう」

「え？」

予想して無かったのか驚いている。

「春姫は魔法で約9割以上を方程式で制御している。対して杏璃は約6割を方程式で制御している。同じ魔法を使ったとして、春姫に比べてイメージをより鮮明にしなきゃいけない杏璃の方が魔法に集中しなければいけない分不利だからな」

「それで、何で私の方が才能が上なの？」

当然の疑問だろう。だから…

「良く考えてみる。方程式の割合が多いって事はそれだけ制御しやすいぶん、相手に解析されやすくなる。方程式ってのはプログラムみたいなものだ、だから解析しやすい」

方程式がデジタルデータでイメージがアナログデータといえれば分かるだろうか。

デジタルは1か0のデータしかない、アナログは0・5のような少数点まで入ってくる。

「なるほど…」

「逆にイメージの割合が多いと解析されにくくなる。つまりどんな魔法か判断されにくいし、打ち消されたり無効化されにくい」

「それって…」

「6割の方程式だけで魔法を使える杏璃の方が将来性があるってことだ」

そう言っつて杏璃の顔を見ると…。

「……………えへへ」

ニヤけていました。

「はあ…だから諦めずに頑張れよ」

「うん！」

(まあ、9割以上を方程式で制御できる春姫の努力も相当だかな)

嬉しそうな杏璃の顔を見ると言えそうになかった。

第六話（後書き）

毎回小説を読んでいただき誠にありがとうございます。

今回は後半にはびねす！本編で描かれていた杏璃ルートの特訓を入れました。

ぶっちゃけ第六話は杏璃の独壇場です（笑）

理由は1年生時点で春姫と雄真がダントツ過ぎて杏璃の出番が作れないのと物語の核心に迫ると弱い者から脱落してしまうため出番確保的な意味を持たせました。

といっても作者、杏璃大好きですが。

次の第七話からは各勢力（？）がそれぞれ動きます。

次回：3月中にもう一回更新出来たらなと思います。

第七話（前書き）

それぞれの信念。

ただそれだけを信じて己の道を進む。

いずれ交錯するそのときまで。

第七話

- 理事長室 -

「これで10人…」

「そろそろなんとかしないと不味いわね…」

理事長室にいるのは御薙鈴莉と高嶺ゆずは。

「そうね…。こつも犠牲者を出されるとさすがにね」

「理事の方からもいろいろ言われてるのよ…」

ゆずはがダルそうに答える。

「理事から…もう嗅ぎ付けてきたの？」

「情報なんて漏れるものよ。それが早いか遅いかの違いだけ。ただ、早く解決しないと私が降ろされるから何とかして鈴莉」

「また無茶を…。しかしあなたに降りられても困るし何とかしてみるわ」

「ええ、こちらでも調べてみるから」

話は終わったのか鈴莉が立ち上がり扉に向かう。

「そつだ、聞いたわよ」

扉に手をかけた鈴莉に向かいゆずはが声をかけた。

「…何を？」

嫌そうに答える鈴莉。

大抵こういうときのゆずはは厄介者に他ならない。

「雄真君のこと、魔法科にいるんですってね。しかもあなた譲りの魔法の才能らしいじゃない」

「……………」

「何を気にしてるのか分からないけど、話してみなきゃ分からない事だつてあるんじゃない？」

「分かっているわよ……………」

そう言つて鈴莉は出ていった。

「やれやれ……。小雪」

ゆずはが声をかけるといつの間にもいたのか、小雪が理事長室に立っていた。

「はい、お母様」

「あなたも動いてちょうだい」

「わかりました」

「そうね…彼も捲き込んだんじゃないさかい」

「雄真さんを…ですか？」

「彼、今回の件に関して何かしら知っていると思うから…それにおもしろくなりそうだし」

後半のボソツともらした本音は聞き流す。

母の悪癖にいちいち付き合っていたら身がもたないから。

それに…

「わかりました…では」

理事長室を後にする。

今まで母の言ったことに間違いなどなかったのだから。

- Oasis -

昼休み、久しぶりに準と八子と一緒に昼飯を食べに来ていた。

「で、どうなんだよ？」

八子が顔を近づけて聞いてきた。

「何が…」

「何がじゃない！魔法科の女の子達に決まってるだろ！」

「またか…」

「また始まったわね…」

「どうなんだよ雄真！」「どうって言われてもな…普通だな」

「はあ！？普通ってお前、あんなに可愛い子達に囲まれて普通だと！？」

八子が騒いでいるがとりあえず無視して食べる。

「あ、小日向君」

「うん？」

声をかけてきたのは同じ魔法科の生徒。

「今日はありがとう。おかげで助かった」
「どういたしまして」
「また困ったらお願い」
「俺で良ければ」
「じゃ、またね」

友達らしき数人の生徒のもとに行つたのを確認した俺は再び昼飯に集中しようとする。

「ゆうーまー！！！！！！！！」
「何だよ…」
「何だよじゃない！お前、今の子は誰だ！お前とどういう関係だ！！」
「クラスメイトだけど…。今日の午前中に実習があつて、そのときに上手くできてなかつたからコツを教えただけ…。って聞いているか？」
「あー雄真…：ハチつたら完全にキレちゃつてるわよ…」
「雄真…：覚g「雄真」グヘッ！」

ハチの頭にお盆が直撃し撃沈。

「杏璃、どうした？それに神坂さんも」
「一緒していい？」
「いいわよ。ハチをどかして…」
「ごめんなさい。それじゃお邪魔します」

春姫と杏璃が来た途端に周囲の男共からの視線が強くなった気がする。

しかし、八子哀れな…。

「初めまして…ですよね？私は神坂春姫です」

「あ、私は渡良瀬準よ。よろしくね」

「私は柊杏璃よ、よろしく」

「うん、よろしく」

「しかし雄真…あんたもすみにおけないわね」

「…何がだ」

杏璃のニヤニヤ顔。嫌な予感しかしないんだが。

「こんな彼女がいたなんて」

「違う」

「そんな照れなくてもいいじゃない雄真」

「準、お前…」

「何、私とは遊びだったの!？」

「小日向君、彼女は大切にしないと…」

神坂さんまで…。

「…コイツは男だ」

「へ？」

「そうなんですか？」

「違うわよ！雄真の言葉に騙されないで…雄真ったらいつも他人の前ではこんなこと言ってるんだから」

「雄真…あんた！」

「それは…ちよつと悲しいですね…」

何ですかこれ？

俺の方が正しいよね？

「いやいや、コイツは本当に男だから」

「…マジなの？」

「杏璃ちゃん！騙されちゃダメよ！」

「そ、そうよね…どっからどうみても女の子なんだし…」

雄真の中で何かがキレた音が聞こえた（気がした）。

「準…学生証見せるかここで裸になるか撰べ」

「ゆ、雄真…こ、怖いわよ…」

準の肩を掴み満面の笑顔で笑っていた。

……

「本当に男の子だったんですね…」

「びつくりしたわ。今でさえ女の子にしか見えないのに」

準の学生証と準を交互に見比べていた二人。驚くのも無理はない。未だに男だと分かっているても女だと信じているやからがいるくらいだ。

「ごめんね」。騙すつもりはなかったんだけど

「いえ、それじゃ渡良瀬君って呼んだ方がいいですよね」

「君じゃなくてさんかちゃんと呼んで。私は春姫ちゃん、杏璃ちゃんって呼ぶから」

「わかりました。準さん」

「よろしくね。準ちゃん」

……

皆で昼を食べていると準が突然話を振ってきた。

「それで、杏璃ちゃんと雄真ってどこまでいってるの？」

「ブツ！」

「雄真汚いー」

「ゲホツすまん…ってか準！俺達はそんな関係じゃない！」

「そうよ！」

準はニヤニヤしながら

「えーでも二人共名前で呼びあってるじゃない」

「それは…」

「あ、それ私も気になってた」

春姫まで乗り気になってる始末。

「それは名字で呼ばれるより名前で呼ばれた方がいいからって、それに杏璃だけ俺のこと名前で呼んで俺が終って名字で呼ぶのも不公平だろ？」

「ふーん…。でも杏璃ちゃんは名前で呼んで春姫ちゃんは名字のままなんだ」

「いや、神坂さんが名前で呼んでほしいなら名前で呼ぶけど」

「え！？」

突然話を振られたせいかわず動揺する春姫。

「えーと、私は…」

「せっかくだから雄真、春姫ちゃんのこと名前で呼んであげなさいよ」

「俺は構わんが神坂さんはいいのか？」

「私はいいですけど…」

「じゃ、よろしくな春姫」

「……………」

名前で呼んだ途端に顔を赤くする春姫。

「どうしたの顔を赤くしちゃって」

ニヤニヤ顔で聞いている準。

「い、いえ…男の子に名前で呼ばれるのって初めてで…」

「そうなの？じゃあ次は春姫ちゃんの番よね」

「え!？」

「だって、雄真が名前で呼んでるのに春姫ちゃんは名字じゃ不公平でしょ？」

「そ、それは…」

やれやれ、準にも困ったものだ…。

そろそろ助け船を出してやるか。

「そのぐらいにしておけ準。春姫が困ってるだろ…それに、そういうのは本人の気持ちが必要であって周りがとやかやく言うことではないと思うが？」

「ちえ、分かったわよ…」

「小日向君…」

安心したような顔を浮かべていた春姫に笑顔で頷いた。

- Side ??? -

瑞穂坂学園 グラウンド

夜8時を過ぎた頃、グラウンドの隅で佇む一人の男。

男は全身黒づくめの格好と周囲の暗闇に覆われ、一目では気づかれない存在とかがしていた。

「来た…」

そう男が呟く。男の視線の先には一人の女生徒。

「宮凧さやか…だな？」

「…誰？」

さやかと呼ばれた女生徒が問いかけるもそれには答えず、女生徒に近づき…。

「お前の魔力をいただく…」

「え…？」

襲った。

……

Side 鈴莉

「遅かった…」

グラウンドの方角で魔力の反応を感知した鈴莉は急いで来たのだが…。

「立花先生、至急この子を保健室へ。確か保健の天津先生はまだ残っている筈ですから直ぐに見てもらって下さい！」

「は、はい！」

一緒に来てもらった当直の先生に指示をとばす。
女生徒を抱え保健室へかける立花先生。

「さて……はあ。やっぱり何も無いわよね」

学園中に探知用魔法をばら蒔いて設置しており、魔力反応、映像、音声、熱源反応まで取れるようにしておいた。

グラウンドを中心に辺り一面の魔法を確認したが全て異常なし。

つまり、魔法による調査は不可能となる。

「となると、頼みの綱は…」

校舎の屋上へ視線を向けながら今後の対策を練る鈴莉であった。

S i d e ? ? ?

「……………足りない」

今日は運動部帰りの女生徒から魔力を盗った。しかし量、質共に良
くはなかった。

目的のためならば手段は選ばないがこれではあまりにも割りに合
わない。

「もつと…」

最近は学園の警備が強化されたせいで派手に動けなくなった。
全ての探知魔法に誤動作を起こさせてから行動したせいで無駄に魔力を消費してしまったのだ。

「……………」

こちらの猶予は残されていない。
何としても魔力を集めなければ…。

「へえ…こんな所にいたんだ」

「！！！！」

馬鹿な、見つかっただと！？

重複転移を繰り返し、なおかつありとあらゆる探知妨害魔法を使っ
たはず…。

いったい誰が…！

「…椿」

「お久しぶり」

そこに立っていたのは天堂椿だった。

なるほど、彼女なら私の居場所が分かってもなんらおかしくない。

「何故お前がここにいる…」

「ただの興味本意よ」

これもおそらく本心。

彼女はいついかなるときも中立を保ってきた。
故に私の居場所を誰かに教えるなどという、“誰かに有利になる”
行動などとらないだろう。
何故なら彼女は傍観者なのだから。

「それが本当にあの子のためになるの？」

「さあな…だが、少なくとも変化がおきる」

それが良くとも悪くとも。

第七話（後書き）

絶・好・調

何故か小説の執筆速度が上昇。

理由はやっぱり暇な時間ができたからなんだろうな…。

一週間はかかるとふんでいた第七話ですが、4日で投稿です。

今回は各勢力（主人公を中心とした生徒達、鈴莉、ゆずはを中心とした大人達、最後に出てきた事件の犯人や独立して動く椿など）の行動を書きました。

それぞれの勢力で温度差がありすぎですが（笑）

シリアス一辺倒の大人組と犯人。

ラブっている雄真（本人に自覚なし）。

というか、雄真君フラグ立てすぎ…。

いや、未だに誰のルートにするか決めてないからヒロイン全員のフラグ立てとけとかは思ってない…よ？

そんなこんなで第八話。

第七話で動き出した話がさらに大きく動きます（予定）。

雄真は事件に大きく巻き込まれる（未定）。

そして物語は佳境へと向かってゆく…。

第八話…3月中には出します（宣言）。

第八話

理事長室

「さて…恒例になってしまった被害報告からしましょう」

そう言って話を切り出す鈴莉。

「昨日は魔法科3年の宮凧さやかさん。陸上部に所属、昨日は部活から帰るところでグラウンドで襲われたわ。魔力は学年では上の下。今までの被害者同様魔力を抜かれた以外に外傷はなし」

「そう…。で、昨日は貴方がいたんでしょ？」

「ええ、当直の先生と一緒に現場に向かったけど時すでに遅し。私達が駆け寄ったときには全て終わった後だったわ…」

はあ…。ため息と共に話を続ける。

「で、調べたんだけど何も出なかった」

「何も？」

「ええ、魔力の痕跡や探知魔法は全て反応なし」

「破壊された形跡は？」

「ないわ。ただ時間がかかるから中身は調べてないけど」

「そう…：そうなる魔法から追っていくことは無理そうね」

「ええ、だから化学側の視点から調べたらあったわ痕跡」

「本当に!？」

「ええ、ただ魔法と干渉するのを防ぐために遠距離からの観測になつたせいで不鮮明な部分も多いけど」

昔から言われているが、魔法と化学は相性が悪い。

簡単な魔法ならともかく、複雑かつ制御が難しい魔法になると特に機械の近くで使えなくなる。

これは機械から発せられる電磁波が魔法に干渉するのではと言われているが、証明されたわけではない。

ただ、電磁波は距離の二乗に反比例してその力は弱くなる。

よって魔法科の校舎には電波を発するような機材は一切置いてないうえに、商用電源コンセントのケーブルを金属管に通すなど徹底した電磁波対策を施していたりする。

鈴莉が持っていたファイルから取り出した写真をゆずはに渡す。

「昨日の夜、警備員さんに頼んでおいた屋上からの監視カメラの映像よ」

ゆずはが写真を覗き込んで見てみるが…。

「…分かりづらいわね」

写真は夜に撮影したせいで真っ暗になってしまい何が写っているのかはつきりしない。

「で、こっちが拡大図」

そう言って出したもう一枚の写真。

「これは…男？」

「ええ、おそらくは。ただ専門家に詳しく解析してもらわないと分からないからなんとも言えないけどね…」

そう言って肩をすくめる鈴莉。

「なんにしても解析待ちか…」

「そういうこと。あとは春姫ちゃん達が何か情報を手に入れてくれたらいいんだけど」

「…鈴莉」

「分かってるわよ…。ただ言ってみただけよ」

子供達に危険な事をさせたい親などいない。

しかし、子供に頼ってしまいたくなるほど手詰まりなのも事実。

理事長室には暗い雰囲気が漂っていた。

Oasis

Side 小雪

私は自分の魔法チカラが嫌いだ。

私の魔法…未来視。

私の場合、視える未来の大半が悪い未来しか見えない。

しかも私が介入したところで大局は変わらないときている。

私はそんな魔法が嫌いだ。でも…未来を変えられないとしても、私は介入するしかない。

大局は変わらなくても局部的には変えられるかもしれないから。

例えば家庭科の授業で鍋をこぼす未来があつたとする。

そのこぼした汁でやけどしてしまう生徒が出る可能性があるのだ。

私が介入することで生徒がやけどする前に対処できる。

大局（鍋をこぼすこと）は変えられなくても局部やけどのしじは変えられるのだ。

だから私は魔法を使う。例え嫌いな魔法チカラだとしても。

「あ、小雪さん。小雪さんもお昼ですか？」

「雄真さん。はい、雄真さんもですか？」

小日向雄真。私の魔法で過去にないほど強烈な…もはや確信できるほどの悪い未来が見えた人…。

しかも二つの未来が視えたただ一つの例外トク。

「すみません一緒にいいですか？今日は混んでるみたいで…」

「はい、構いませんよ」

彼が私の対面の席に着く。

「そうだ。タマちゃん」

「あいな！」

私のマジックワンドのタマちゃん（正式名称、スフィアタム）を呼び出す。

「お、タマちゃん」

「スフィアタム殿お久しぶりです」

「小日向の兄さんにセレスはん、お久しぶり」

タマちゃんは私と違って明るいから周りの人と直ぐに仲良くなる。私にとってそれは誇らしくもあり同時に羨ましくもある。

「お水を汲んできてもらえますか？」

「あいあいさ〜」

「タマちゃんだけで大丈夫なんですか？」

「心配しなさんな、小日向の兄さん。わてに任しときー」

「いや…。セレス、お前もついていってくれ」

「了解しました」

「ほならセレスはん、行きまっか〜」

そのまま二つのワンドはふわふわ飛んで行った。

「ところで雄真さん」

「何ですか？」

「最近神坂さん達といろいろ調べてるそうですね」

「…はい？」

「ですから最近神坂さんや柊さん達と何か調べてるそうじゃないですか」

「いや…あれは柊が勝手にやりだしたことで俺と神坂さんはただ巻き込まれただけなんです…」

巻き込まれただけ…彼らしいと言えば彼らしいですが、せつかくですのでもっと巻き込まれてもらいましょう。

「そうなんですか。ところで雄真さんに頼みたいことがあるのですが…」

「頼みごとですか、いいですよ」

「（放課後、私に）付き合ってくれませんか？」

「はい？」

.....

『はあああああああ！！！！？！？！？』

Oasisに響き渡る声。

「あの、小雪さん？それはいったいどういつ…」

「高嶺先輩あんな奴のことが…」

「う、嘘だ…嘘だと言ってくれ！」

「小日向…またアイツか」

周りの皆さんが何故か騒がしいですが気にしないでおきましょう。

110

「私と一緒に来てほしいんです」

「一緒に…どこかに行くんですか？」

「で、デート…」

「高嶺先輩考えなおして下さい！」

「小日向…殺しても、えっちょよ！なんだこれ…あああああああ！」

「……」

どこからやってきたのか、黒い鎖に連れられて行く生徒。

「はい、放課後一緒に来て下さいね」

「ええ、いいですが…いったいどこに？」

満面の笑みで

「後のお楽しみです」

第八話（後書き）

投稿おくれちゃった、てへ（殴

.....

すいません調子こきましたごめんなさい。

本当は昨日（3月31日）には完成してたんですが寝ちゃった、てへ（殴）（殴）

ごめんなさいごめんなさいごめんなさい生きててごめんなさい。3月中には更新するとかいいながら平気で破ってごめんなさい。

ただ…『反省はしていない』。

さて、本文の内容ですが今回の主役は小雪さんです。私の独自解釈で小雪さんは魔法が嫌いとなりました。

だって見える未来が、悪い未来が大半って…子供ならトラウマですよ？

そんな魔法なら大半の人は嫌いになるんじゃないでしょうか？

で、次にタマちゃんですよ。

関西弁とかマジ無理です。

作者は関東側なんでバリバリ標準語です。

違和感がありすぎてどこから突っ込めばいいのか分からないかもしれませんが多目に見てやって下さい。

そんなわけで次回第九話：え、違っつて？

番外編？何それ美味しいの？

次回、第零・五話。

「ワンドの休日」

本編に手詰まり感が見えてきた作者が苦し紛れに出す番外編。

本編とは一切関係ないただのネタですがお楽しみ下さい。

以上

第九話（前書き）

重要なお知らせがあります。読者の皆様お手数ですが活動報告のほうを確認して下さい。

第九話

- Side 小雪

- 魔法科の森 -

「リ、セルダム・ラ・アドゥール」

「タマちゃん！」

「あいあいさー！」

フードを深く被った男の魔法とタマちゃんが激しくぶつかる。

「ほなさいならや〜」

ぶつかった瞬間、タマちゃんが爆発を起こし周囲の視界が爆煙で塞がれた。

「逃げられましたか…」

「無念やわ」

残機を一つ減らしながらもポケットから出てくるタマちゃん。

「タマちゃん、周囲の索敵お願いします。100まで使用を許可しますので」

「あいあいさ〜。ほなら皆行きまっせ〜」

ポケットからぞろぞろと出てくるのは全てタマちゃん。

その総数は全部で100。

その全てが一斉に散り散りになった。

「で、小雪さん…」

「何ですか？雄真さん」

「何ですか？じゃないですよ…これはどうということですか？」

「見ての通りですが…」

彼が慌てるのも無理はありませんか…。

何せ放課後に来てほしいと頼んだはいいがいきなり立ち入り禁止の森の中…それも奥深くに連れられていきなり戦闘ですからね。

「どうということ何ですか？」

「それは…雄真さんの方が詳しいのではありませんか？」

「…何のことですか？」

少しうるたえたようですし、もう少し踏み込んでみましょう。

「雄真さんは今学園で起きている事件をどれだけ知っているんですか？」

「事件…魔力が抜かれるとかいう通り魔事件のことですか？」

「そうです」

「いえ…杏璃につき合わされて事件の調査を試みたくらいですが…」

「そのとき、何か犯人につながるような手がかりはありましたか？」

「手がかり…事件が起こった場所に鋭利な刃物で切りつけたような後がありました」

「それはおそらく犯人の魔法でしょう。風の魔法を多用していましたから。他には何か？」

少し考えた後、特にないと答えた雄真さん。

なにももう少し違う聞き方をしてみましょう。

「先ほど戦闘した相手が犯人だとしたらどうしますか？」

「はい？」

「実はですね、この辺りに犯人が潜伏しているとの情報が入りました…。それで今日はここに来たんですが」

本当は私の未来視がここで戦闘が行われることを予見したから来てみただけなんですけど、まさか犯人だとは思いませんでした。

ちなみに犯人だと特定した理由は現場に残された僅かな魔力痕と先ほど戦闘した相手の魔力痕が一致したからなんですけど。

「偶然出会って戦闘に…ですか？」

「はい、そうです」

「小雪さんは学園から頼まれて犯人を探してる…。そんなところでですか？」

たったこれだけの会話でここまで…さすがですね。

「なぜそう思うんですか？」

「小雪さんのお母さんはこの理事長さんでしたよね？」

「はい、そうですけど」

「小雪さん自身はClass Aの一流の魔法使い。学園側はこの事件を大事にしたいとは思っているとするれば、信頼できて実力もある小雪さんに調査ないしは解決のための要請の話がいつていてもおかしくはない」

凄いですね…ここまで言い当ててくるとは思いもしませんでした。

「では私が仮に学園側で動いていたとします。そうしたら一般の生

徒である雄真さんをわざわざ危険がある場所へ連れ出そうとしますか？」

「それは俺を巻き込むためでしょう。俺に事件の調査を手伝ってほしい…そんなところですか？」

「そこまで分かってるなら話が早いです。雄真さん手伝って下さいませんか？」

「うぐっ…」

しまったと言っ顔をする雄真さん。

「だめ…ですか？」

上目遣い＋涙目。

男性はこれに弱いとある雑誌に乗っていたので試してみます。

「わ、わかりました…」

ちよろい…。

内心ほくそ笑みながら雄真さんに笑顔で

「ありがとうございます雄真さん」

「…小雪姉さん…」

タマちゃんが震えています。気がしないことにします。

「では雄真さん、行きましようか」

「行くつてどっ…」

雄真さんの質問には答えずその後雄真さんを振り回し続けました。

第九話（後書き）

今回は短いです。

というか第八話のネタを引っ張ろうと頑張ったが途中で挫折した結果です。

ごめんなさい。

第十話に関してはネタは考えていますが、活動報告に書いた通りいつ投稿できるかは不明です。
気長に待ってやって下さい。

最後に前回あとがきで第零・五話を出すといっていましたでしたが先に第九話をUPしました。

その辺の詳しいことも活動報告に書きます。

楽しみにしていただいていた読者の皆様には心よりお詫び申し上げます。

なお、どれだけ時間がかかろうとも幸せの意味は必ず完結させます。

第十話

- 某県立体育館 -

12月の半ばのこの日、瑞穂坂学園魔法科の生徒は県立体育館に集合していた。

「ついに来たわ！この私が春姫を超える日が！」

「あ、杏璃ちゃん……」

「落ち着け杏璃」

「なに言ってるのよ、私があんた達を超えるこの日に落ち着いてなんていられますか！」

今日は魔法協会が実地するClasss昇格試験の日だ。

今日と明日の二回行われ、今日は筆記試験で明日実技試験が行われる。

(試験参加者は所定の位地について下さい)

「始まるからそろそろ行くぞ」

「そうね……」

「お互い悔いの残らないよう頑張りましょう」

「ああ」

「ええ」

春姫の言葉に頷く俺と杏璃。

そして試験が始まった。

- Side 雄真 -

自分の受験番号が書いてある席につく。

(さて…)

周りの様子をチラッと見てみる。

周りは誰も知らない人だらけだ。

どうやら俺はクラスメイト達とは離れた場所らしい。

(それならそれで好都合…か)

机の上にある回答用紙に名前を書き始まるのを待った。

(それでは初めて下さい)

そして試験が開始した。

……

(回答やめ)

50分間の試験が終わり回答用紙が回収される。

翌日が技能試験になっているせいか結果は即日発表されるため、受験者は結果が発表されるまで帰らずに待つことになる。

- 体育館入口 -

「あ、おーい雄真ー」

「杏璃ちゃん…」

相変わらずの騒がしさで呼んでいる杏璃と恥ずかしそうに周りを気にする春姫のもとに行く。

「二人ともお疲れ」

「雄真もね」

「小日向君お疲れ様。試験どうだった？」

「まあまあだな。70は越えたと思う」

試験の合格基準は筆記、実技共に70点以上かつ筆記と実技の合計が150点以上であることが条件になる。

「余裕そうね。でも負けないわよ雄真」

「なんだ杏璃、試験のできは良かったのか？」

「ぐ…ま、まあ実技では私が勝つわよ！」

「筆記で70とれなきゃ実技は受けられないんだが…」

「うるさいわね！」

「まあまあ二人ともお昼にしましょう」

春姫の仲裁が入る。

「そうね。お昼にしましょう」

現金な奴め…。

……

昼休みが終わりまもなく結果発表の時間になる。

試験会場となった体育館のステージにプロジェクターが設置され、スクリーンに合格者の番号が映し出される。そのためステージ前は受験生でいっぱいになっていた。

「凄い人数ね……」

「こりゃ直ぐに確認は無理そうだな」

「そうだね……少し待ってようか」

3人で空くのを待つことに。

……

しばらく待つと受験者が離れていき空いてきた。

「そろそろ見に行くか」

「ええ」

スクリーンに近き確認する。

「あつた！」

「私も！」

先に見つけた二人が喜びながら抱きしめあつた。

「……………」

馬鹿な……。

「雄真……どうしたの？」

「ない…」

「え？」

「乗ってない…」

「うそ！ちよつと受験票見せなさい！」

杏璃が俺の受験票を引ったくつた。

「961…」

スクリーンに映し出されている番号は959、963、964…。

俺の番号は無かった。

「ちよつと待つて！」

春姫が叫ぶ。

「あれを見て！」

春姫が指を指した場所はスクリーンの端満点合格者の欄に。

961

入っていた。

- 瑞穂坂学園 -

夕方に学園に戻ってきた魔法科生徒一同。

結局クラスで筆記試験を突破したのは俺達3人を含め6人。
合格者は明日に備えて各々で練習をした。

ちなみに不合格者は明日一日魔法科教師陣によるありがたい特別講習（補習ともいう）が待っているらしい。

合掌…。

・翌日・

再び試験会場に集まった魔法科生徒達。

今日は筆記試験合格者しかいないため昨日と比べてかなり空いていた。

「なあ、杏」「うるさい！」「…」

さつきからこんな感じである。

杏璃は筆記が70点のギリギリ合格。

筆記、実技共に70点以上かつ二つの合計が150点以上が合格基準のため杏璃は実技で80点以上をとる必要があるのだ。

「それじゃあまた後でな」

触らぬ神に祟りなし。

……

試験は属性魔法と魔法の収束と実演の3種類だった。

属性魔法は自分の属性（春姫なら火、杏璃なら雷）の魔法を見せれば終わり。

これは簡単で火だったら杖の先に火を灯すだけで合格だからだ。

実演は実際に魔法を見せること。

どんな魔法を使ってもOKで魔法が制御できてれば合格。

最後に収束。

これが一番厄介で、杏璃が苦戦していたキューブでの特訓もコレになる。

魔力を多く収束すればするほど評価が上がるがその分制御が難しくなる。

「次の10人は会場にどうぞ」

「それじゃ、私の番みたいだから行って来るわね」

考え事をしていたら順番が来たらしい春姫が立ち上がる。

「頑張れ」「頑張りなさいよ」

「えええ！」

二人の応援に頷き春姫は中に入って行った。

「受かるといいな」

「受かるに決まってるでしょ私のライバルなんだから」

なんだかんだ言って春姫のこと信用してんだな杏璃は。

……

「ただいま」

暫く待つと春姫が戻ってきたがその笑顔が結果を物語っていた。

「次の方」

さて、俺の番か。

「頑張つてね。雄真君」

「春姫に続きなさいよ」

「ああ」

二人の声に答えながら試験会場に向かった。

・試験会場・

「小日向雄真さんですね？」

試験会場には受験者が10名中に入り試験管が3名の13名がいる。

一人ずつ確認してから試験の説明をつける。

「それでは属性魔法の試験を行いますので一人ずつ魔法を見せてください」

名前を呼ばれた者から自身の魔法を見せていく。

「小日向さん、どうぞ」

俺の番が回ってきた。

「すみません、得意な属性とかないんですが」

「では、使える属性を見せてください」

あまり派手にやって目立つのもアレだしな。
適当にやって終わりにするか。

「では火の属性で」

そう言っつて杖に小さな火を灯す。

「はい、それではキューブに魔力を収束させてください」

キューブを左手に持ち魔力を込める。

「出来ました」

「え？」

たったの二秒。キューブを渡されて詠唱もなしに魔力を込めたのだ、普通では考えられない。

「で、では魔力量を・・・え？」

「込められた量は311。普通の魔法使い（魔法使い平均）の3倍の魔力だ。」

「これでいいですか？」

「え、ええ・・・合格です」

合格を言い渡された雄真がキューブを渡し部屋を出ていく。

「な!？」

試験官の手には未だに収束したままのキューブ。少しでも集中力を途切れさせると即発散するような代物にも関わらず、込めた魔力は発散される気配がない。

「解除」

部屋の扉に手をかけた雄真の眩きとともにキューブから込められた魔力が発散していった。

「な、なんだったの・・・」

それが後に残された試験官と受験者の総意だった。

第十話（後書き）

まず最初に9ヶ月間放置していたことに関して謝罪します。
申し訳ありませんでした。

詳しくは活動報告で書きます。

これからも更新はしますが、決して早くはないと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7027i/>

はびねす！ - 幸せの意味 -

2011年3月18日12時19分発行